日本地域学会第55回年次大会　報告

■日程　2018年10月6日（土）
■場所　北海学園大学豊平キャンパス7号館4階D42教室
■内容　特別セッション「SDGs実現のための社会経済指標」
　　オーガナイザー：橋本隆子副学長
　　座長：原科幸彦学長

（１）第1報告「企業の利重極大化基準とSDGs」
　報告者：内田茂男常務理事
　討論者：朝日ちさと（首都大学東京）
1820 年代より経済発展が進んだことに伴い、企業の経済活動は負の外部性として独占・環境問題・健康被害・労働搾取などの問題も生んできた。対策として様々な国際基準や行動指針が示されており、これらに期待もするが限界もある。そのため格付けを活用し、社会的責任においてよい評価をもらった企業には税制優遇するなど、税制に組み込むことが必要ではないかという問題提起がなされた。
討議では、「利潤極大化原則を維持しつつ、企業行動に社会的費用を内部化する規範・責任を組み込むという理解なのではないか」「格付け機関によるモニタリングが必要であるが、その実効性をいかに確保できるか」「税制に組み込むにしても、インセンティブとなる税率は検討が必要」といった議論がなされた。

（２）第2報告「生活の質とSDGs：社会健康指数の提案」
　報告者：中原秀樹（東京都市大学）
　討論者：鐘ヶ江秀彦（立命館大学）
SDGs のゴールの１つに「誰一人として置き去りにしない」というものがあるが、果たしてこれが本当に可能かという問題提起がなされた。1970年代からSDGsに至るまでのさまざまな国際基準、認証、枠組みづくりなどの取り組みを整理したうえで、「フレーミングのずれ」（例：パームオイル問題を環境問題ととらえる見方と人権問題ととらえる見方がある）があること、GDPの上昇と反比例するThe index of Social health（2003、フォーダム大学）のデータを示したうえで、「誰も置き去りにしない世界」のために生活の質向上／幸せな社会とは何かについて議論が必要であることが提言された。
討議では、「社会を良くするために科学的データを使って課題整理を行い検討することは重要であるが、その先、どのように行動に落とし込んでいくか？」「人々の欲望と願望が社会を良くする装置である。研究から得られるFindingsの社会への反映について、科学者だけでなく一般市民も巻き込んでいくことが必要」「SDGs の中で役に立つのは、Knowledge Platformだけ。マルチステイクホルダープロセスが重要」「個別プロジェクトごとにImpact

Assessment やって意思決定しなければならない」といった議論がなされた。

（３）第 3 報告「大学の社会的責任（USR）活動を評価・改善するための指標づくり―SDGs を視野に入れて」

報告者：齊藤紀子、橋本隆子、安藤崇、杉本卓也

討論者：小野聡（立命館大学）

2000 年代初頭に日本の 32 私立大学が集まって研究しとりまとめた報告書や ISO26000、CSR 研究などをベースに、USR とは大学のステイクホルダーがもつニーズに意味ある応答をしていく活動であり、その成果を社会にフィードバックしていく必要があることを示した。インドネシア大学 Green Metric やサステナブル経営に取り組む企業の事例などが参考になること、千葉商科大学の USR 活動を評価・改善していくための自己評価および社会的指標開発の研究を行っていることを報告した。

討議では、社会的指標開発のための分析枠組みの試案が示されたほか、「ステイクホルダーを細分化することにより定量的評価が可能な指標を抽出できるのでは」「統一的な指標設定は難しいのでは。プロジェクトごとの評価を積み上げていくことが重要では」「年次評価のみならずリアルタイムでの評価も有効では。その際 Gaming の考え方も活用できるのでは」といった議論がなされた。

（４）第 4 報告「大学における SDGs 推進の KPI としての ESD（持続可能な開発のための教育）」

報告者：橋本隆子、伊藤宏一、今井重男、滝澤淳浩、山田武

討論者：氷鉋揚四郎（筑波大学）

千葉商科大学が推進する「Heartware の醸成」のために ESD（持続可能な開発のための教育）が重要であること、2017 年には日本の学習指導要領にも ESD が取り込まれたことが指摘され、ESD が KPI として有効であるか検討する研究であることが説明された。千葉商科大学では 2017 年より特別講義やエシカル教育を推進していること、特別講義終了時に ESD の効果測定として実施したアンケートからは、90％の学生が特別講義を契機に SD を認識ことが明らかになったことが報告された。

討議では、「アンケート回答結果、自然言語処理だけでは不足しており、今後定量的評価と定性的評価を改善し、効果を可視化していきたい」「SDG s は混沌としているが、人間がコントロールできる一つの取り組みとして「意識変化」がある。SDG s を達成できるものとしてはこれがほとんどすべてでは」「知識でも倫理でもなく、システムを理解し、システムに伴う世界観を移植することが必要では。システムを理解させるのは本を読んでいても無理（天気予報を文章だけで読んでも無理）なので、因果関係を理解させること。その効果を測定することが重要では」といった討議がなされた。